

# 【当たり前前の日常を守るために】福岡県 筑陽学園中学校

二年 松田 風叶

蛇口をひねれば、いつでもきれいで透き通った水が出る。私たちはこの当たり前の光景に慣れきっており、水が無限に湧き出てくるかのよう錯覚してしまふことがあります。しかし、水は決して尽きることのない資源ではありません。私たちの住む福岡の歴史を振り返ると、その事実が痛いほどよく分かります。

今から約30年前の1994年、福岡は記録的な猛暑と少雨に見舞われ、深刻な水不足に陥りました。「平成6年渇水」と呼ばれるこの出来事では、実に295日間にも及ぶ長期間の給水制限(断水)が行われました。決まった時間にしか水が出ないため、人々はポリタンクを持って給水車に長い列を作り、お風呂の水を極限まで再利用し、トイレを流すことすらためらう日々を送ったといえます。今の便利で衛生的な生活からは想像もつかないような過酷な日々が、この街には確かに存在したのです。

この過去の痛ましい教訓から私たちが学ぶべき最大のポイントは、「水が無くなってから慌てるのでは遅い」ということです。ダムの水位が極端に下がり、いよいよ断水が始まってから節水を心掛けても、失われた水はまたまとまった雨が降らない限りすぐには戻りません。本当に大切なのは、まだ水が十分にある「日常」の中で、いかに水を大切に使うかという意識です。

断水になる前に、一人ひとりが少しずつ水を節約すること。これこそが、断水という最悪の事態を遠ざけ、平和な暮らしを維持するための最大の防御策になります。例えば、歯を磨く時にコップに水をくんで出しっぱなしを防ぐこと。シャワーの時間はほんの1分短くすること。お風呂の残り湯を洗濯や掃除に賢く活用すること。これらはどれも、今の生活の質を大きく落とすことなく、誰でも今日から始められる小さな行動です。福岡に住む人々全員がこの小さな行動を実践すれば、街全体で1日あたり膨大な量の水を節約することができます。その積み重ねが、ダムの水を温存し、渇水期を乗り越え

る大きな力となるのです。

節水とは、単に「生活の中で我慢を強いられるもの」ではありません。「断水せずに、これからも今まで通りの快適な生活を送るための前向きな準備」なのです。水不足による不便さや、衛生面での不安を抱えながら生きる日々を、私たちは二度と繰り返してはなりません。

何気なく使っている蛇口の向こう側には、限りある自然の恵みがあります。約30年前の厳しい断水を乗り越え、水の大切さを身をもって知った福岡の街だからこそ、私たちは率先して水を大切にすると考えています。約30年前の断水を経験した世代から、私たちは「水の大切さ」というバトンを受け取りました。蛇口をひねれば水が出る。このささやかで、しかし何物にも代えがたい幸せを次世代へ引き継ぐために、私たちは今、行動しなければなりません。

「断水しないために、節水する」これはシンプルな決意だと思います。しかし、このシンプルな決意が、私たちの街と、私たちの命を支える唯一の鍵なのです。

さあ、今日から一緒に節水を始めてみませんか。